

イギリスで経験したこと

武藤安子

日記から



一九七一年四月より一年余にわたる、ロンドンでの、当時三歳の娘をまじえた私たち親子の生活は、私の日記によると次のようにはじめられていたらしい。

六月×日（木）

今日も雨。これで二週間晴れの日はない。まるでシャワーのようにザーザー降りつづく。冷えびえと、しずくが窓をたえまなく落ちる。木の枝がそよぐほどにも降る。こんな日でも傘をささずに歩いている人が多いのはどういうわけか。寒い。火をたくと暖かいので、A子（娘）と、朝から台所にケーキを焼きながらこもる。A子が字のひろい読みをするようになり、興味を示すので、ダンボールを四角に切って字カードを一緒につくる。（略）

雨で洗濯ものが全然乾かない。そろそろ手洗いをやめて、街の洗濯場（コインを入れて洗濯する乾燥機つき共同洗濯場）に行こうと思う。

七月×日（土）

昼すぎから、牧場へ、ミルクしぼりを見に行く。すべてのプロセスがオートマティックになっていて驚く。A子は、ガラス戸越しに目をこらして見ていたが、突然ふり返って、「ママ！牛のおっぱいはこれだけあったのね。Aちゃん、いくつかなと思っちゃった」と、両手で指を二本ずつ、四本出して、さも大発見をしたようにさげふ。片手で四本出さなかったのは、牛の乳の形態も同時に私に伝えようとしたのだろう。その時、その場でしかできない表現であるものだなと感激。

夕食後、アパートの前庭の草刈り。九時すぎまで空は明るい。

T (私の夫) は、ウィンブルドンのテニスの観戦にテーパーコーダー持参で出かけ、ボールの音や歓声を吹き込んできて聞きほれている。

A子は明日から、教会が設けているブレイグループで、午後の三時間を過ごすことになった。

「父・母・子」活動

「私たち家族の生活は、ほとんど知人もなく、時間的、経済的その他限られた状況においてははじめられたので、それまでの日本の生活にそれほど規定されず、そこでの生活が、具体的に、未来の計画にかかわりをもたない点で、きわめて現在相の強いものであった。

したがって、私たちは、まず生活をはじめるときに、その社会のしきたりやきまりがつよく意識され、社会という「物」的な力が大きくはたらく状況において、いかに「自己」の主体性を保ちながら「人」として生活することができるかが当面の課題となる。そもそも、生活の原動力となりうる経済的基盤は、すべて父親の「サイン」によってもたらされ、また、家族の安全を保障するような大切な用件は、父親の「言語」力を必要としたので、父親の展開する「物」活動が大き

くはたらきはじめた。母親は、その父親を補助し、できるだけ子どもの「自己」活動によりもたらされる要求を満たそうと、「人」活動を活発にしようと思っても、父親は、家族「人」活動と「自己」活動を「物」活動で統制、管理しておいて、できるだけ早く社会に同化すべく道をいそぐ。その結果、母親の主體的な活動の場とかが制限され、子どもにとっては、「イギリスでは、そういうごあいさつとはちがうんです」などといわれることが多く、イライラした状態の日々をはじめ、家族に小さな危機がおとずれる気配がみえてくる。

その危機を打開するために、いろいろな努力がなされる。父親は、できるだけ母親を、あるいは家族を外に連れ出し、その社会とじかにふれる機会を多くつくる。

母親は、その社会へ主体的にかかわる方法を得るために、たとえば言語の力をつけて父親の「物」活動を分担することや、母親自身が、教育関係施設の見学、実習など、社会的活動の場へ参加するようにつとめる。あるいは、「人」関係を身近なところから少しずつ広げながら、そこに父親の参加を求め、「物」としての社会の意味を変えようはたらきかける。その社会での人々の生活に接して、これがその社会の習

慣だからと思えば、父親は、庭の草刈りや、来客の折の家の
中の手伝いもするようになる。

このようにして、父親の主として「物」活動、母親の主と
して「人」活動、子どもの主として「自己」活動がかかわり
あいながら展開し、それぞれの主体的活動を発展することに
おいて、家族の「まとまり」としての力をもちながら、次第
に生活を定着させていったといえるだろう。

そして、何よりも、家族の生活を意味あるものにしたの
は、どのような状況にあっても「自己」活動を発展させる、
生命力あふれた子どものかかわりにおいてであろう。大人
にとっては、イギリス滞在は、ほんの一時期であり、そこで
の経験は、抜けられたり、つみ重ねられたりするものであっ
ても、子どもにとっては、いま、ここでの体験は、その時だ
けのものであり、しかも子どもの全体を変えてしまうような
新しい目—成長のあかし—を、はっきりとうつしだす。その
ような「自己」活動があつて、「物」活動も「人」活動も意
味あるものとなりえたといえよう。

個人的ではあるが、ひとつの特殊な状況を家族というチー
ムでどのようにのりきって、それぞれの主体的な活動を高め
たかという体験は、女性であり、母であり、社会的には保育

者である私の方にある課題をなげかけた。

ひとつは、家族内の父・母・子の役割が、「物」活動、「人」
活動、「自己」活動における行為者と、当然のごとく一致し、
固定化する傾向のつよい現状（社会のあり方）についてであ
る。

もうひとつは、「自己」「人」「物」活動がかかわりあいな
がら展開する、人間の諸活動（医療、看護、教育、治療その
他）においてそこに参加するものが、自分はいま、どの活動
を主体的に担ってそこにいるのか、それぞれのかかわりあい
がどのように変化すると、人間として意義ある活動がもたら
されるかという認識と行為の必要性である。

子どものかかわり

A子は、生まれてから、両親のほかには、保育園の先生がた
や多くの人たちの「世話」になつて育ってきた。彼女にとつ
てはそのだれもが、そのとき、そこではなくてはならない人
であり、「好き」な人であるような育ちかたをしてきた。子
どもはみなそうであるように、A子も、たいいていの場所は、
そこがいちばんよくて、大好きであり、そこを自分の成長の
わきあがるエネルギーの源と変えてしまうことができるらし

い。

ロンドンに着いた時、「どうしてみんな茶色(髪の毛の色)のヒトばかりなの？」と目をみはっていたが、一か月もたつと、しげしげと鏡を見て、「Aちゃん、かみの毛、だんだん茶色になってきたみたい。五歳になったら茶色になれるんだ」とうれしそうに語るようになる。

ミルクしほりを見た日より前から、A子は私としばしばその牧場に牛を見に来ていた。ロンドン北部とはいえ、住宅の密集した地域にわずかな牧草地を残して、およそ二〇頭ばかりの乳牛がはなたれていたが、乳をいっばいに飲んで、そこ、ここに群れている牛たちを彼女がはじめて見た時は、相当なショック(?)を受けたらしい。

家へ帰ると、画用紙いっばいに大きな牛の絵を描き、おなかに「オッパイ」を八つも十もくつつけた。その絵は毎日描きつつけられ、ついに「赤い服の兵隊さん」にも、「お日さま」にも、「いちご」にも、必ず「オッパイ」がつつけられて絵はおしまいになる。

いつまで続くのかと思っていたら、あのミルクしほりの大発見を境に、牛の絵は事実をふまえたものとなり、ほとんど描かれることがなくなった。

彼女の「オッパイ」は、まさに、何かを「さがしている

目」そのものであり、「知る」とか「おぼえる」ということが、こんなにもさがしていることなのであり、こんなにも「わたしが自分でみた」ことなのだということは、私にとっても驚きであった。それと同時に、この過程を、たとえば「知識の獲得」とよぶならば、そこには、毎日のように一緒にいてかわりつづけた人がいて、そして放牧された牛のミルクしほりという牧場の生活―しごと―が展開されていて、それをとおして、子どもの自己が主体的にいのちを働かせつづけた、その結果であるということを目の前にみて、子どもの発達にかかわるおとなの役割を、はっきりと認識することができたような気がする。

ことばにこころ

私自身の「ことばの習得過程にある人」としてのいくつかの体験が、今も、私の「人とかかわりにおけることば」に関して注意深くさせるのに役だっている。

たとえば、月に一度、アパートの掃除に来ていた婦人は、ロンドンの下町育ちで、日本に関する知識をあまり持たない人であったが、備えつけの冷蔵庫が、いわゆる「霜」でひど

く氷りつきやすく、その掃除に苦勞して、ある日私が、「こんな冷蔵庫は見たことない」とこぼすと、彼女は、「おお、日本には冷蔵庫もないのか」と驚く。この人は、「このような」とか「同じように」という会話の中でとんでもない思いちがいをしていることにおたがいに気づいて、後で笑ったものだが、生活基盤も経験も異なる一人一人が、同じことはを媒介にしても、思っていることがこんなにちがうものかと驚きもした。ことばは、それぞれの経験をとおして語られ、それをお互いが認識することで、はじめて、人と人との相互理解が促されるものだなとつくづく思ったものである。

ロンドン滞在の短い期間に、幼稚園や教育・治療施設などへ、ほんの一日の見学から数週間にわたる実習まで、いろいろなかたちで参加する機会をえた。これらの経験は、帰国後、縁があつて、再びもとの職場に戻つてから、直接、間接に役立つことができた。

施設にはじめて訪れると、まず、給食を子どもたちと一緒に食べていくか、もしそうならいくらくらを……と聞かれることが多いので、たとえば、ほんの一、二時間を許された見学でも、昼食時に子どもたちとよるこんでテーブルをとともにして、同じものを食べることにしていた。

昼食は、部屋ごと、クラスごとになされる場合もあるが、全校が遊戯室やホールに集まって、いくつかのテーブルに分かれ、ひとつのテーブルには、先生、上級生や他のクラスの子どももまじり、会話を楽しみながら食事をとる場合も多い。あるところでは、ある宗旨を守る人たちだけでグループをつくり、家から特別に持参したものを食べていた。

私は、お客さまとしてひとつのテーブルに紹介されて席につき。先生が「何でも好きなことを聞いてみなさい」と会話を促すと、子どもたちは、「どこから来たのか」とか「ぼくのママの友だちか」とか、中には、だまってそつと手をさし出してくるだけの子どもなどさまざまである。先生は時折、「あなたの方から何か聞いてほしい」と促される。子どもとの会話は容易でない上に、私の英語はいつまでもたどたどしいものだったので、通じあえる内容は豊かではなかったが、多くの子どもたちと知りあうことができて、ひとりひとりを鮮明におもい出すことができる。

帰る時、子どもたちは、「またあしたね」と手をふつて去っていく。私と、子どもたちとの「あした」は、私の中に、私の活動をおして実現されていく「あした」であることを心に銘じている。（日本肢体不自由児協会中央療育相談所）